京都大学熊野職員宿舎跡地　遺跡発掘調査現地説明会資料

平成 27 年 12 月 11 日（金）12:30～14:00

遺 跡 名：白河街区跡（しらかわがいくあと）
所 在 地：京都市左京区東竹屋町（京都大学熊野職員宿舎跡地）
調査機関：京都大学文化財総合研究センター（担当：冨井眞・内記理）
調査期間：平成 27 年 9 月 28 日～平成 28 年 2 月（予定）

＜はじめに＞

京都大学熊野職員宿舎の改築にともない、周知の遺跡である予定地約 1800 ㎡の発掘調査を実施中です（図 1 右・図 2）。今回、**幕末頃の瓦を積み上げた構造物**を良好な状態で確認できました。また、**埋設された壺の中から**、江戸時代の遺跡の発掘出土品としては珍しい、**墨が出土**しました。これらの遺構・遺物の重要性を考慮し、発掘成果の現地説明会を開催するものです。

＜発掘成果＞

- 瓦積み遺構は、砂地の地盤に掘り込んだ大きな溝の中に構築されています（写真 1）。幅 6.5m、奥行 0.7～1.1m、高さ 0.5m、の規模で残存していることを確認しています。そのうち幅約 4m程度では、北向きに面をそろえて意匠を意識しながら、瓦を隙間なく積み上げています（写真 2）。瓦は、桟瓦とともに道具瓦なども多く用いているほか、巴文以外にも卍文（阿波蜂須賀家の家紋）などの文様を持つ軒丸瓦も含まれています。
- 溝の検出地点は（写真 3）、幕末の**絵図によれば、阿波徳島藩邸の敷地の北縁の東部**に位置する可能性が高いので（図 3）、溝は藩邸を区画する堀と思われます。そして、瓦積み遺構は、門のような重量のある構造物を支持するための地盤改良（＝地業）と解釈できます。阿波徳島藩邸の造営にともなうものと考えています。
- 溝の中では、瓦積み遺構の東で、瓦積みの北面ラインに一致する杭列や、杭列に近接して木材を、朽ちた状態で検出しています（写真 1）。土留めの施設と考えられます。溝の埋め土は２層に分かれ、下位の地層は、粘土のような泥や細かい砂が堆積していて水が溜まったことを示唆します。上位の地層は、南側から土の塊などを投げ込んで埋めていったような堆積を示し、それに乗るかたちで瓦積み遺構があります。区画が、空堀から壁へと変化した可能性もあります。
- 瓦積み遺構のすぐ際で北面の西端近くには、土師器の壺が埋設されていました（写真 4・5）。地鎮の祭祀にともなうと考えられます。また、瓦積み遺構の中央と思われる蓮花状に瓦を配置した部分から北方に 7.5m程度の辺りで、同様の形状の壺の埋設遺構が確認されました（写真 4・6）。こちらは、割れ落ちていた蓋を取り外すと、墨が出てきました。胞衣壺（えなつぼ：子供の成長祈願など）の可能性があります。
- 以上の成果をまとめます。**幕末頃の稀少な遺構（瓦積み地業）と遺物（墨）を検出した。幕末絵図にある阿波徳島藩邸に対応する可能性の高い遺構が確認された。幕末当時の地業や地鎮などの祭祀の一端が垣間見える。**

写真1　瓦積み遺構をともなう溝（西から）

写真2　瓦積み遺構（北から）

写真3　調査区の全景（北から）

写真4　瓦積み遺構と壺の位置関係（北から）

写真5　地鎮と思われる壺（西から）

写真6　胞衣壺（えなつぼ：南西から）

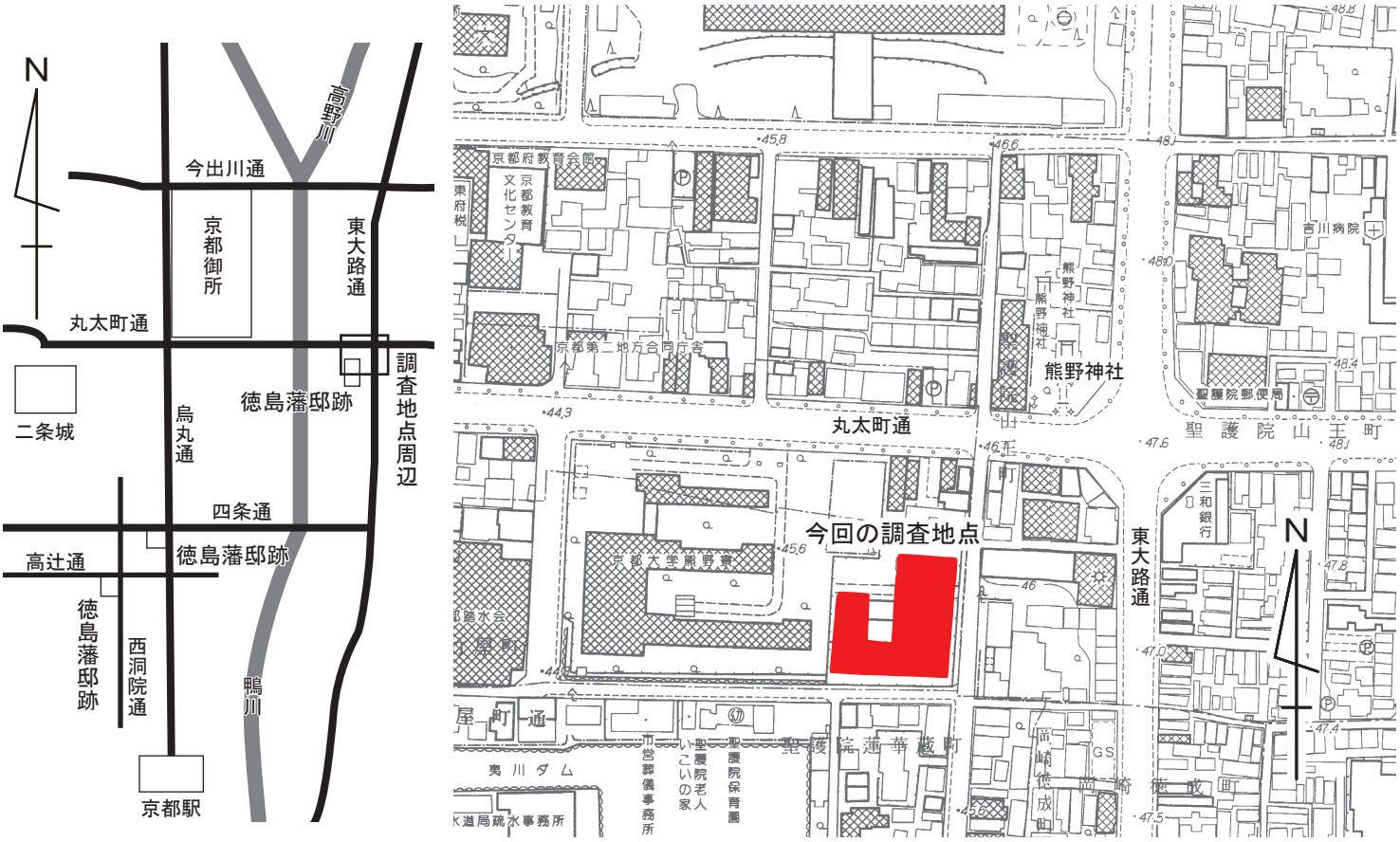

図１　京都市内における徳島藩邸跡と今回の調査地点の周辺

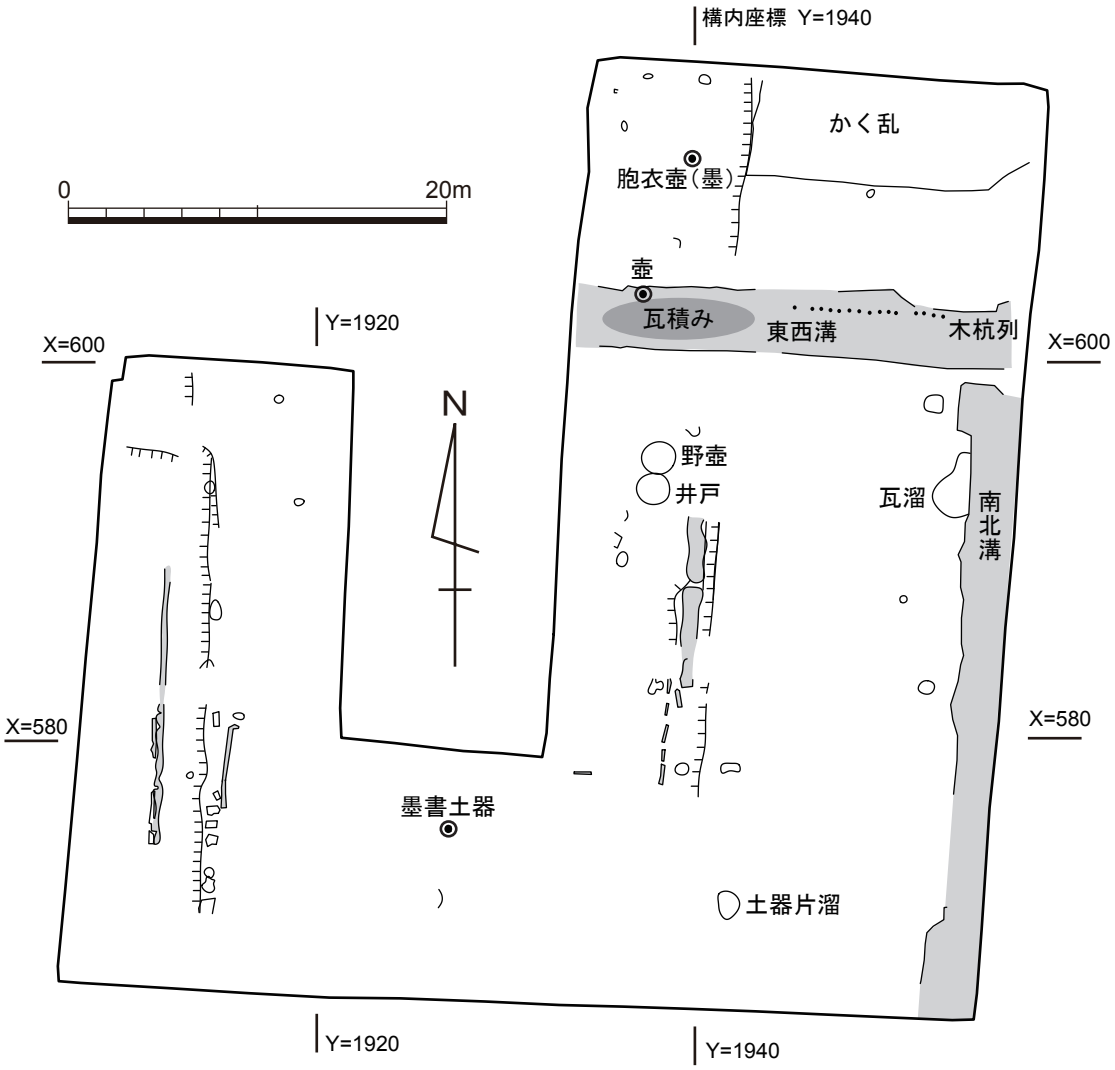

図２　幕末の遺構配置概略図（S=1/400）

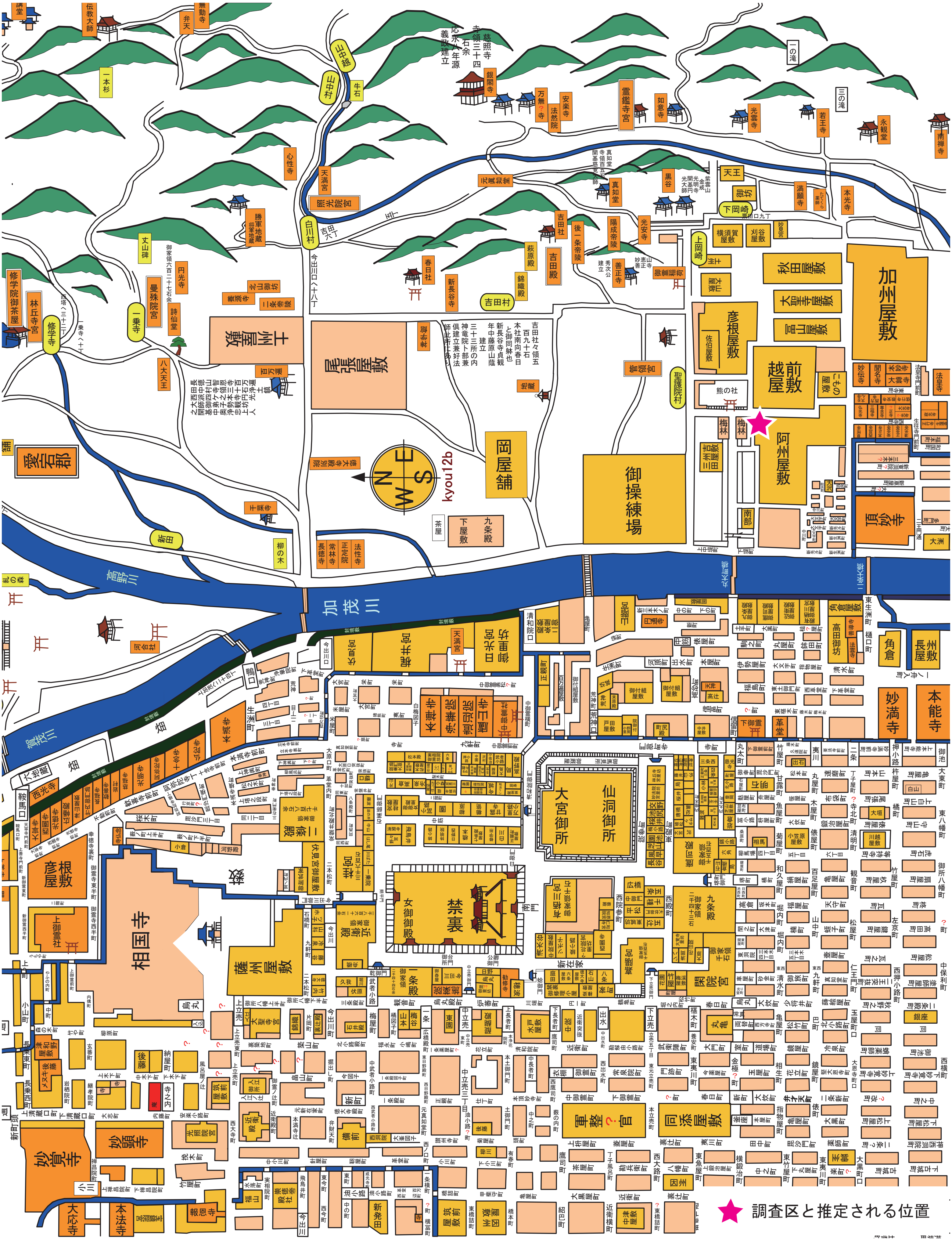

図 3　幕末京都絵図（京都市歴史資料館のウェブサイトより。http://onjweb.com/netbakumaz/kyoumap/kyou12b.pdf）